館長だより第３号（２０１７／８）

観光と博物館

中国の古典の一つである『易経』に「観　国之光、利用賓干王。」とあるのが『観光』の文献に見る最初のものであるとされています。その意味するところは「他国の光華や、その国の文物制度を見る事であるが、転じて他国の山水・風俗などを遊覧すること」であるとされています。ここでの「遊覧」とは、任務や目的が明らかで、その完遂、完結、問題（課題）解決などが至上命題となっている場合や物見遊山があり、遊覧とは主たる目的は、「旅」そのものであるともいえましょう。

その「旅」もかつての国内観光に限らず、海外にその行く先を求めており、一方海外からの観光客も増加の一途をたどっているのが現状です。

ところで紀伊風土記の丘では、現在開催中の夏期企画展は「道路の下から新発見」と題したもので、近畿中部の京都、奈良、和歌山を結ぶ幹線道路である京奈和自動車道の建設に先立つ調査で新たに発見された和歌山県内の遺跡での出土品を取り上げたものです。そこには縄文時代から近世に至る歴史を物語る様々な文化財が一堂に集められており、紀ノ川水系とともに多くの旅人や文物が往来したかつての賑わいの姿をほうふつとさせるものがあります。まだご来館いただいていない方にはぜひお運びいただきたいと存じます。

これに引き続いて、本年 9 月 30 日から 11 月 26 日まで開催する秋期特別展「道が織りなす旅と文化」は、夏期企画展と同じくいずれも「道」とかかわりが濃い内容となっています。

とくに昨年、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の追加登録があり、さらに熊野青岸渡寺を第一番とする西国三十三所巡礼が始まってから、来る平成 30 年で 1300 年という記念すべき年に当たります。今回の展示は、熊野詣、西国巡礼という熊野発、あるいは熊野着の信仰の道にスポットを当てて、それらがいかなる人々によって支えられ、かつ拡がっていったかを考えるものです。遠く熊野の信仰が東北地方や四国地方に根付いていることや、それを支え拡げていった多くの先人の努力に敬意を表するとともに、その文化の営みを、さらにそれらを結ぶ道とともにたどっていくものです。

なおこの展示は全４章から構成されています。その第１章は「祈りの道」で、和歌山を中心に古代、中世に活動してきた先達と呼ばれる宗教者たちの痕跡を経塚資料や各神社に残される様々な文化財資料から熊野信仰の広がりを紹介しようとするものです。主たる展示品としては懸仏、経筒（熊野那智大社蔵）、御正体（阿須賀神社蔵、和歌山県指定文化財）、備崎経塚資料（熊野本宮大社蔵）ほかを予定しています。

第２章は「旅する宗教者」で熊野御師によって伝承されたという愛知県や高知県に残る神楽と祭具、祭文などを紹介します。

第３章は「参詣者の道」で巡礼地を参詣する人々に伝わる笈摺や往来手形、さらに人々の願いを託され、各地を廻った西国三十三度行者に焦点を当て、その関係資料を紹介しま

す。ここでは西国巡礼三十三度行者関係資料（太子町立竹内街道歴史資料館寄託資料ほか）をはじめ、西国三十三カ所巡礼一番札所の熊野青岸渡寺所蔵資料などを展示する予定です。

第４章は「祈りと観光と」で、多くの参詣者を誘うために用いられた説教道具や出開帳に関連する資料を紹介します。さらに出開帳を経て人々の娯楽として描かれた妖怪絵の移り変わりを見ていきます。

主たる展示品としては鬼神の角、安珍の扇子（道成寺蔵）、百鬼夜行絵巻（国際日本文化センター蔵）ほかを予定しています。

なお一部資料については保存上の理由のため展示期間が限られている場合があります。